

十八世紀末イギリスにおける女性たちの政治意識

——デヴォンシャー公爵夫人の選挙活動をめぐって——

梅 垣 千 尋

〔キーワード〕 十八世紀、イギリス、女性、政治、選挙

はじめに

(1)

一七八四年四月、激しい選挙戦の最中にあつたロンドンのウエストミンスター選挙区では、ひとりの女性が人びとの注目を集めていた。同選挙区から立候補したホイッグ党のリーダー、チャールズ・ジェームズ・フォックスを応援する選挙キャンペーンを派手に繰り広げていた第五代デヴォンシャー公爵夫人ジョージアナ (Georgiana Cavendish, Duchess of Devonshire, 1757-1806) がその人である。一般的にいつて、十八世紀イギリスにおける下院議会の選挙制度は民主的なものとはほど遠く (有権者は全人口の5%にも満たなかったといわれる)、選挙活動といえはほとんどの場合、コネクションを利用した水面下での票集めが行われるくらいであつた。しかし、国会議事堂の位置するロンドン中心部、ウエストミンスターでは事情が大きく異なつていた。十八世紀後半の時点で、この選挙区の有権者は一万人以上とその数が全国でもっとも多く、得票数を伸ばすためには応援演説や個別訪問といった大衆的な選挙活動が重要な鍵を握つていたからである。

こうした特徴をもつウェストミンスター選挙区は、かつてその美貌と大胆なファッション・センスで社交界を魅了したことのあるデヴォンシャー公爵夫人ジョージアナ（以下はジョージアナと略記）^{〔1〕}が活躍するにはうってつけの場であつたといつてよい。当時の新聞報道によれば、ジョージアナは選挙戦の序盤から公衆の前に姿を現し、フォックスを象徴するキツネ（fox）の尾の飾りを帽子につけ、通常ならば貴族の女性が足を踏み入れられないような庶民的な通りに出て、人びとにフォックスへの投票を呼びかけたという。真偽のほどは定かでないが、ジョージアナが肉屋の男にキスをして、なかば色仕掛けで票を稼ごうとしたという噂もあつた。公爵夫人がみずから庶民と関わりをもつというこの選挙パフォーマンスはおおいにセンセーショナルだったらしく、投票期間中、彼女の行動は数多くの風刺画の題材となつて印刷メディアを賑わした。このときのウェストミンスター選挙区では、二議席にたいして三人が立候補者していたが、最有力候補であつた海軍少将のフッドは当初から当選を確実視されていたため、実質的な選挙戦はフォックスともう一人の候補者、セシル・レイとのあいだの一騎打ちとなつた。はたしてジョージアナの奮闘がどこまでフォックス陣営にとつて有利にはたらいたのか判断は分かれるところだが、激戦の末、第二位の得票数で見事当選を果たしたのはフォックスのほうであつた。^{〔2〕}

イギリス史研究において、以上のようなジョージアナの選挙活動が比較的よく知られるようになったのは、一九九〇年代以降のことであらう。リンダ・コリーは一九九二年に著した『イギリス国民の誕生』のなかで、ジョージアナを「ウーマン・パワー」という章の題名にふさわしい、因習的な制約を受けながらも公的で愛国的な活躍をした女性のひとりと描きだした。^{〔3〕}また、一九九八年にはアマンダ・フォアマンが、幅広い読者に向けてジョージアナの伝記『デヴォンシャー公爵夫人ジョージアナ』を出版し、夫やその愛人との複雑な関係を詳細に描く一方、一七八四年の選挙だけにとどまらないジョージアナの政治への関わりを明らかにした。^{〔4〕}さらに二〇〇〇年代に入ると、十八世紀後半の政治文化的な文脈のなかにジョージアナの活動を位置づけようとする論文の発表が相次ぎ、それまで特異なものと思われが

ちだった彼女の政治活動は、さまざまな角度から相対化されつつある。⁽⁵⁾たとえば、ジュディス・S・ルイスは、ジョージアナ以外に一七八四年のウエストミンスターでの選挙活動に加わった女性として、ラットランド公爵夫人（レイ陣営）やポートランド公爵夫人（フォックス陣営）など、両陣営あわせて十数名もの女性たちの名前をあげている。⁽⁶⁾また、レナタ・ラナは、親族ではない候補者を応援したことや、生まれたばかりの子どもの育児を放棄して選挙活動に関わったことなど、しばしば当時の女性の活動範囲や活動規範を逸脱するものと考えられてきたジョージアナの行動が、実はそれほど珍しいものではなく、同じような女性の例は他にも見いだすことができる⁽⁷⁾と指摘している。アマンダ・ヴィカリーに代表される一九九〇年代後半以降の女性史の新たな潮流は、十八世紀の女性たちが家庭内に活動領域を限定されていたように見えながら、実際には女性ゆえに課せられた規範や制約を巧みにすりぬけ、さまざまな回路をつうじて公的な事柄や政治的な活動に関与していたことを強調している。⁽⁸⁾一七八四年のジョージアナの活動にかなする近年の研究は、こうした女性史の新たな動向を取り入れ、十八世紀後半における広範な女性の潜在的な政治参加の実態に照らしてジョージアナの選挙活動をとらえかえす方向へと、次第に軸足を移してきているといえよう。

さて、こうした研究動向を踏まえた上で、本稿ではジョージアナ自身の選挙活動の内容そのものからは少し視点を移し、彼女の活動にたいする同時代の女性たちの反応に焦点を合わせることにしたい。繰り返しになるが、十八世紀後半のイギリスにおいて、何らかのかたちで政治に関心をもつ女性たちがジョージアナ以外に複数存在していたことは、近年の新たな女性史研究のなかですでに明らかにされている。もしそうした女性たちが確認できるとするならば、はたして彼女たちはジョージアナの選挙活動をどのように受け止め、どのように評価したのだろうか。ジョージアナ自身の活動の中身よりも、むしろ彼女に注がれたさまざまな女性たちのまなざしを分析することで、十八世紀末イギリスにおける女性たちの多様な政治意識を明らかにし、さらにそこからジョージアナの活動がもつ社会的意味を考察することもできるはずである。

こうした課題に取り組むにあたり、本稿ではまず中心的な史料として、女性の手による書簡や出版物のなかで、一七八四年のジョージアナやフォックスの選挙活動にたいして直接的に言及している箇所を具体的に検討する。ただし管見のかぎり、直接的な言及はそれほど多く確認することができないため、やや視野を広げて、ジョージアナが行った「ような」女性の政治的活動、すなわち貴族女性の政治関与や女性の党派的活動などに一般的なかたちで言及した女性著述家の出版物も、検討の対象に含めることとする。それにより、ジョージアナ個人にたいする評価を考察するという当初のねらいがぼやける恐れはあるだろうが、むしろ取り扱う言説の幅を広げることにより、一七八四年の選挙戦の直後だけではなく一八〇〇年前後までという長いスパンで、ジョージアナによる選挙活動のインパクトを考えることが可能になると思われる。

一 ジョージアナの政治活動にたいする女性たちの反応

女性たちの反応を見ていく前に、一七八四年のウエストミンスターでの選挙戦について、これまで十分に説明してこなかった基本的な事実をいくつか確認することからはじめたい。すでに述べたように、このときウエストミンスター選挙区ではフォックス、フッド、レイという三人が立候補していたが、このうち野党系から出馬したのはフォックスのみであり、フッドとレイは、フォックスの落選をねらった当時の首相、ウィリアム・ピット（小ピット）からの強力な後押しを受けていた。この選挙戦がしばしば、フォックス派 (Foxite) 対ピット派 (Pittite) という対決図式でとらえられたのはそのためである。また当時の選挙制度は、現在のように投票日を一日だけに特定しておらず、このときのウエストミンスター選挙区では、四月一日から五月十七日までの四〇日間（日曜日を除く）にわたって投票が行われ、集計結果はその日ごとに発表された。その間の選挙戦の展開は、まず当初からフッドが他の二人を引き離し、四月上旬に

はレイがフォックスをリードしたが、中旬からフォックスがレイを激しく追い上げ、四月二十七日以降は次第にフォックスの勝利が固まっていくという流れをたどった。⁽⁹⁾ 選挙にかんする報道は、政府系新聞の『モーニング・ポスト』誌、また野党系新聞の『モーニング・ヘラルド』誌や『モーニング・クロニクル』誌などがそれぞれの政治色をだして日々の情勢を伝えており、当然ながらジョージアナの選挙活動をめぐっては、これを批判する政府系新聞と、逆に擁護する野党系新聞のあいだの報道合戦が繰り広げられることになった。

以上のことを確認したうえで、ジョージアナの選挙活動にたいする女性たちの言及を具体的に見ていくが、実のところ、このときの彼女の行動にたいして明確な賛意を示した女性の記録を見つけることはきわめて難しい。ジョージアナ自身、四月の第一週が終わるころには、懸命な応援にもかかわらずフォックスの票が伸びないこと、また他の女性たちも同じように選挙活動をしているのに、自分だけがメディアの関心を集めていることにうんざりし、母親のレディ・スペンサー宛ての手紙に「選挙はもう一切やめる」と書いていた。⁽¹⁰⁾ 心配した母親がそれ以上選挙に深入りしないよう戒めていたこともあり、ジョージアナはみずからの選挙活動をあまり肯定的にとらえることができなかったようである。

ジョージアナと親交があり、かつ選挙戦の当事者ではなかった女性著述家たちの記録を調べてみても、ジョージアナの選挙活動にたいする好意的な評価は見つからない。ジョージアナやフォックスの友人で、詩集なども発表していた元女優のメアリ・ロビンソン (Mary Robinson, 1758-1800) は、ちょうどこのときイギリスを離れており、選挙について何も書き残していない。また小説家のシャーロット・スミス (Charlotte Smith, 1749-1806) は、一七九〇年代半ばから出版のバトロンを引き受けてくれたジョージアナにたいして書物の冒頭や書簡で何度か賛辞を捧げたが、スミスはジョージアナの母親としての愛情深さや優しさを賞賛するばかりで、一七八四年の選挙活動にはまったく触れようとしていない。⁽¹¹⁾

好意的な評価が確認しづらいのにたいして、女性たちの言及のなかで比較的容易に見つかるのは、ジョージアナにた

いする批判や、その活動にたいする戸惑いを含んだ記述である。大まかにとらえれば、これらをいづれも否定的な評価としてひと括りにしてもよいのだろうが、しかし批判の中身やその論調を見ていくと、女性たちの反応は明確な拒絶反応から微妙な違和感を示したもので、否定の程度や方向が少しずつ異なっているように思われる。そこで、以下ではこうした細かいニュアンスの違いに配慮しながら、女性たちの否定的反応を大きく三つのカテゴリーに分けて跡づけ、それぞれの立場をマッピングしてみたい。

二 ピット支持の立場からの反応

ジョージアナの活動にたいして違和感や嫌悪感を示した女性たちは、それぞれのような立場からどのようにジョージアナの活動を問題視したのだろうか。

もともと明確な否定的反応を示した陣営としてあげられるのは、ピットを支持する立場をとった女性たちである。その代表例としてまず、一七六〇年代から文芸界で活躍し、「ブルーストッキングの女王」と謳われたエリザベス・モンタギュ (Elizabeth Montagu, 1718-1800) の場合を見ていこう。モンタギュは、この選挙戦がはじまる前からジョージアナとは個人的な知り合いで、会食の場で同席したこともあったらしい。しかし、一七八四年四月に書かれたとされる手紙(宛先人は不明)のなかで、モンタギュはひと言、「デヴォンシャー公爵夫人は非常に男性的な振る舞いで (By a most masculine manner) 選挙活動を行い、大いに辱めを受けています」と記している¹²⁾。みずから庶民の住む通りを練り歩くなど、ジョージアナが大胆に公衆の前に姿を現したことを指しているのだろう。一見するとここでモンタギュは、選挙活動そのものを「男性的」とみなして、その活動に加わったジョージアナを非難しているようにも見えるが、しかしモンタギュ自身が選挙活動への参加を否定していたと考えるのは早計である。モンタギュの夫はかつてトリー

党系の議員になったことがあり、彼女自身は一七七五年に寡婦となつてからも、地元のニューカースルで晶屑にする人物を選挙に出馬させるなど、水面下で政治的な影響力を發揮したといわれている。実際、先のジョージアナにたいする言及に続けて、モンタギューは「ヨークとその地方では私たちが勝利をおさめるだろうと思います。私はごくわずかも利害のあるところでは努力してきましたので、私の支持者たちはみなピット支持者 (Pitmen) になるでしょう！」と書いていた。⁽¹³⁾ここからわかるのは、モンタギュー自身がピット支持の立場から票を動かすという、ジョージアナの選挙キャンペーンにも匹敵する実質的な選挙活動を行つたという事実である。この背景を踏まえれば、ジョージアナにたいするモンタギューの冷ややかなまなざしは、女性が政治に関わること自体への違和感というよりも、むしろピット派としての党派的な敵対心から生まれていたと理解すべきものだろう。

これと類似した態度を認めることができるのは、モンタギューの友人で、同じくブルーストッキング・サークルの一員であつたフランシス・ボスカウェン (Frances Boscawen, 1719-1805) の手紙である。ボスカウェンは一七八四年四月十二日付けのレディ・チャタム (小ピットの母親) 宛ての手紙に、次のように書いていた。

フォックス氏を応援する選挙活動で毎日その姿をさらしているデヴォンシャー公爵夫人の恥ずべき行動について、あなたがもしお耳にしていたら、さぞ衝撃をお受けになることでしょう。彼女が耳にした市場での言葉、猥雑なことに加えてその話題すべて、彼女が目にしたことすべては、間違いなくお話することもできません。何ということでしょう！ 話に聞くと、彼女は毎日のように通りに出て、意見を交えようとしないう油商人を買収し、朝九時から夜までこうした仕事ばかりしているというのです。彼女は馬車から降り、路地のなかに分け入っています。帽子についていた羽根は尾っぽにかり、たくさんのごろつきたちが彼女のまわりを取り巻いているのです。⁽¹⁴⁾

明らかにここでボスカウエンは、みずから街頭に出て、庶民に囲まれながらフォックスへの投票を呼びかけるジョージアナの行動を「恥ずべき」ものにとらえている。しかしこの言明が、党派的なバイアスからまったく無縁な、中立的位置から生まれていたと考えるわけにはいかないだろう。「耳にしたら衝撃を受ける」ことや、「お話しすることもできない」ことを、わざわざ手紙のなかで話題にすること自体、考えてみれば不自然な話である。とりわけこの手紙が目下、選挙でフォックスと対立していたピットの母親に宛てて書かれたものである以上、そのなかに単なる報告を超えた意味が込められていたことは十分に疑ってかかってよい。モンタギユの場合と同様、ボスカウエンの場合も、亡き夫は軍の提督にまで上り詰めて、地元で議席を確保していた人物であり、ボスカウエンは政治の世界での個人的なネットワークの重要性を十分に知っていたはずである。レディ・チャタムというピット陣営の有力な貴族女性にむけて、ジョージアナの行動がどれほど非常識なものかをことさら語ってみせる姿勢には、同じピット支持者としての相互の結びつきを強めようとするボスカウエンの意図が垣間見えるように思われる。

ピット支持の立場を代表する女性として、最後にもうひとり、同じくブルーストッキング・サークルの一員で、モンタギユとボスカウエンのいづれとも個人的に親しかったハナ・モア (Hannah More, 1745-1833) の言及を見ておきたい。モアはモンタギユやボスカウエンのように、家族に議員がいるような上流の家柄の出身ではなかったが、やはりジョージアナの選挙活動にたいしては、二人と同様な嫌悪感を示していた。ロンドンでジョージアナの行動についての新聞記事や風刺画を目にしたモアは、友人のアン・ケニコットに宛てて、選挙戦中盤の一七八四年四月二二日に次のような手紙を書いている。

私は夫が彼女を閉じ込めるか、靴を取り上げるか、隅においておくか、行儀の悪い子どもたちにびつたりの罰を何でも与えたらよいのと思います。窓はどれも彼女を描いた版画でいっぱいです。いくつかは滑稽なだけです、

なかには非常に不快なものもあると聞いています。⁽¹⁵⁾

これはつまり、親が子どもをしつけるのと同じく、夫であるデヴォンシャー公爵が妻のジョージアナを外出させないよう断固とした姿勢をとっていたに、というシニカルな中傷である。モアはこの手紙の後半でジョージアナを描いた版面に言及しているが、もしかしたらこのときモアが目にしていたのは、家の外でフォックスの応援に精を出すジョージアナの姿と、生まれたばかりの子どもの世話をおしつけられて、家庭でひとりおむつを替えているデヴォンシャー公爵のあいだのコントラストを描いた有名な風刺画だったのかもしれない。いずれにせよ、ユーモラスな表現をとりながらも、ジョージアナをやんちゃな「子ども」にたとえる言い方には侮蔑的なニュアンスがあり、これは明らかに悪意のこもった批判になっている。

ただし、家の外で選挙活動に飛び回るジョージアナをモアが快く思っていなかったことは確かであるにせよ、別の手紙には、モア自身がこのときの選挙活動を楽しんでいたかのような記述も見いだせる。姉妹のひとりに宛てて一七八四年四月に書かれたとされる手紙には、選挙期間中のある日、モアがコヴェント・ガーデンの近くを馬車で通過しようとした際に思いがけなく群集に取り囲まれ、フォックスのために隠れて選挙活動をする「フォックス夫人」に間違われた、という出来事が綴られている。民衆に囲まれる経験は、モアにとって「怖い」ものではあったらしいが、しかし彼女は手紙のなかで、このことを「思いきり笑ってしまった(I laughed heartily at this)」と告白しており、「フォックスの妻」という誤解にたいしてまんざらでもない様子である。⁽¹⁶⁾ さらに同じ手紙では、この出来事に続き、モアが選挙戦のあいだに思いがけなくフォックスに好印象を抱いてしまったというエピソードが正直に語られている。それによると、「私の主義主張にとつては不運なことに、ある日、私は選挙活動中のフォックスに遭遇しました。彼がとても賢く感じてよい人に見えたので、もし別の方向に視線を向けていなかったら、もう私はだめになっていたと思います。」⁽¹⁷⁾

ギヤリック夫人ら周囲の友人たちとともにピットを支持していたにもかかわらず、モアはほんの一瞬ではあれ、個人としてのフォックスに魅力を感じていたらしい。先のケニコット宛ての手紙のなかで、選挙活動に夢中になったジョージアナを揶揄しながらも、モア自身が選挙中のフォックスとの意外な出会いを楽しげに語っていたのは興味深い。ひとつの推測ではあるものの、先の手紙に書かれていたジョージアナへの批判には、フォックスと一緒に生き生きと選挙キャンペーンで活躍するジョージアナにたいする一種のジェラシーのようなものが含まれていたと考えることもできそうである。⁽¹⁸⁾

さて、こうして手紙のなかに記されたジョージアナの選挙活動にたいする言及を見ていくと、互いに論調の違いはあるものの、モンタギュ、ボスカウエン、モアは三者ともピット支持という立場から、ジョージアナにたいして党派的な反感を抱いていたことを確認することができる。その際、彼女たちがジョージアナの政治活動を、民衆との接触を伴う点、家庭の外で活動している点、また諷刺画をつうじて公の話題の的になっている点などから、いずれも貴族女性のあべき姿からの逸脱としてとらえていたことは、ひとつの共通点として注目されてよいだろう。ただし、あらためて強調しておきたいのは、彼女たちがジョージアナを批判する一方で、自身はピット支持という明確な政治意識をもち、有力者との個人的関係を深めながら政治的ネットワークの強化に貢献するという、十分に政治的な活動に関わっていたという事実である。モンタギュ、ボスカウエン、モアの三人が問題にしていたのは、ジョージアナの選挙活動が、彼女たち自身の政治への関わり方と大きく異なっていたという点であり、女性が政治に関わることや、女性が政治的関心をもつこと自体を彼女たちが否定していたわけではなかったのである。

三 ラディカル・ホイッグの立場からの反応

次にひとつのカテゴリとしてまとめることができるのは、「ラディカル・ホイッグ」と呼びうる立場の女性たちである。政治思想的にいえば、この立場は一六八八年の名誉革命が「不完全」なものに終わったという理解にもとづき、それ以降の議会が（そのなかに入り込んだホイッグの政治家たちも含めて）宮廷内の国王勢力と癒着して、国民の利害を代表したものになっていないことを批判するという基本的姿勢をとっている。「オールド・ホイッグ」または「オーネスト・ホイッグ」という呼称が用いられる場合もあるが、これはいずれも宮廷と結託したホイッグ勢力とみずからとを差異化するために使われた言葉として理解してよい。

一七八四年のウエストミンスター選挙区でのラディカル・ホイッグの立場を理解するためには、それ以前の動きを含めて若干の説明が必要であろう。一七七〇年代後半から、この立場をより鮮明にして政治改革運動を展開しはじめたのは、クリストファー・ワイヴィル、ジョン・カートライト、ジョン・ジェブといった活動家たちであった。彼らは当初もっぱら議会の外部で、より多くの国民の声を代表した議会への制度改革を求める請願運動やネットワークづくりを進めていたが、やがて議会改革運動に前向きな姿勢を示していたフォックスと協力関係を結ぶようになる。その連携の成果として、一七八〇年に行われた選挙ではラディカル・ホイッグの活動家たちが、はじめてウエストミンスター選挙区から立候補したフォックスを新たな改革派のリーダーとして強力に支援し、当選へと導いた。しかしその後、フォックスは一七八三年二月に、それまで彼自身が野党の立場から激しい対立姿勢をとっていた与党のノース政権とひそかに手を結び、フォックス・ノース連合政権を成立させてしまう。この連合がラディカル・ホイッグの活動家たちを大いに失望させたことはいままでもない。ジョン・ジェブは、一七八三年に書かれたとされる手紙（宛先人は不明）のなかで、

「彼『フォックス』の損失を残念に思う」と述べ、それまでフォックスとのあいだに信頼関係が築かれていたにもかかわらず、「彼の交友関係、彼のコネクションが他の計画へと彼を縛りつけてしまい、その生活習慣があまりにも彼を飲み込んでしまったので、野心が彼の主たる情念になってしまった」と記している。¹⁹⁾ここでジェブがフォックス自身というより、その交友関係を問題視している点は意味深長であるが、いずれにせよ、ラディカル・ホイッグの立場の人びとは一七八三年二月以降、もはやフォックスを改革派として支持しようとはしなかった。

このような立場から議会の成り行きを見守っていた女性のひとり、ジョン・ジェブの妻、アン・ジェブ (Ann Jebb, 1735-1812) である。彼女は一七七〇年代には新聞に論説を投稿するなど、夫とともに活発に議会改革運動を盛り上げ、周囲の友人からは「偉大な女性政治家 (a great politicianess)」とあだ名されるほどだった。²⁰⁾夫と同様、一七八三年にフォックスへの期待が裏切られるという苦い経験をした彼女は、それでも議会改革への望みをつなぎ、運動のリーダー的存在だったカートライトに宛てて、現状認識を共有するために何度か手紙を送っていた。多方面から非難されたフォックスとノース連合政権は結局、一七八三年一月に国王ジョージ三世によって更迭されることになるが、その後の一七八四年一月二日付けの手紙のなかでアン・ジェブは、もし再び連合政権が成立すれば、議会は権力を思いのままにし、「国民を都合の良いように奴隷化してしまう」と危惧の念を表明している。²¹⁾実のところ、一七八三年の年末から一七八四年はじめにかけては、国王の介入によりフォックスが政権の座を追われ、それに代わって二四歳の若さでピットが首相になるという、予想もつかない政権内部の変化が続いていた。アン・ジェブはこうした動きをにらみつつ、みずからの取るべき立場を見定めていたらしい。同じ手紙のなかで彼女は、無原則に敵対勢力と連合するフォックスの政治運営にたいしても、また国王に権限を与えるピットの政治運営にたいしても、ともに「国制を転覆する」と厳しい評価を下している。²²⁾さらにその数ヵ月後、議会の解散が取り沙汰されるようになると、アン・ジェブは八四年三月三日付けの手紙のなかで、次のように強い危機感をあらわにした。

もし議会が解散するようなことになり、選挙の混乱や、臍肩の立候補者の気を悪くさせることや、そういったことを恐れるあまり、人びとが改革の声をあげなければ、私たちは破滅して立ち直れなくなるのです。⁽²³⁾

アン・ジェブの理解によれば、一七八四年の選挙で自分たちの改革派が勝利しなければ、議会改革運動は壊滅的な打撃を受ける恐れがあった。おそらく同じ危機意識から、夫のジョン・ジェブはウエストミンスターでの選挙戦がはじまると、かつて臍肩にしていたフォックスではなく、そのライバルのレイを応援する側にまわっている。すでに述べたように、レイはピットの後援を受けていたが、かつては議会改革運動を推進する立場をとっていたため、ラディカル・ホイッグにとっては支持することに抵抗の少ない候補となっていた。期せずしてラディカル・ホイッグは、反フォックスという一点においてピットと共闘することになってしまったわけである。いずれにせよ、本稿の目的にとって重要なのは、アン・ジェブがジョージアナの選挙活動について何らかの情報を得て、記録を書き残していたのか否かという点であるが、残念ながら現在のところ、直接的な言及を確認することはできていない。ただ夫と同様、フォックスとその交友関係にたいして強い不信感をもっていたアン・ジェブの立場を考えると、ジョージアナにたいしては敵対的な姿勢をとっていたと見て間違いないだろう。

このようなラディカル・ホイッグの立場をとった女性としては当時、他にも八巻本の『イングランド史』を書いたことで知られる歴史家のキャサリン・マコーリ (Catherine Macaulay, 1731-1791) がいたが、マコーリはちょうど一七八四年の春からアメリカに行っており、このときの選挙については何も書き残していない。もうひとり、ジェブたちとともに政治改革運動に関わったりチャード・ブライスに師事し、やや下の世代でラディカル・ホイッグ的な発想に共鳴していた女性として浮上するのは、のちにフェミニストとして有名になるメアリ・ウルストンクラフト (Mary Woll-

stonecraft, 1759-1797) である。一七八四年の時点でロンドン北部にいたウルストンクラフトは、当時は特にウェストミンスターでの選挙戦について記録を残さなかったが、それから八年後、一七九二年に出版した『女性の権利の擁護』のなかでは、ジョージアナへの間接的な言及とみなしういくつかの批判を展開している。まず一つ目は貴族女性にたいする批判である。ウルストンクラフトによれば、上流階級の女性は「誤った洗練、不道徳、虚栄」の種を撒き、社会全体に「腐敗 (corruption)」を広げているという。具体的な「腐敗」の内容としては、もっぱら彼女たちの贅沢三昧の生活が指摘されているが、同時にウルストンクラフトは、女性たちが「不正な手段」を使って権力を握っていることを繰り返して批判しており、この権力への介入にたいする批判は、政治の舞台の裏側で、権力者の男性に取り入って影響力を行使する貴族女性にたいする警戒として読み込むこともできるだろう。二つ目は、既存の議会制度にたいする批判である。ウルストンクラフトは、女性も政府のなかで代表権をもつべきである、という有名なフェミニニスト的主張を、次のように展開している。

こんなことを言ったら笑われるかもしれないが、女性が政治の審議に直接参加することがまったく許されず、ただ独善的に支配されるのではなく、自分たちの代表者をもつべきだ、と私は本当に考えている。しかし、現在の代表制度全体は、この国においては専制支配の便利な道具に過ぎないのだから、女性は不平を言うには及ばない。⁽²⁵⁾

特に注目すべきなのは、この後半部分である。ウルストンクラフトによれば、現状の議会制度そのものが「専制支配の便利な道具」である以上、女性は参政権がないからといって不平を言ってもはじまらないという。要するにこの言い分をまとめれば、既存の不十分な議会制度を維持したまま、ジョージアナのように女性が選挙活動を行ったとしても、結果的には「専制支配」の正当化に手を貸すことにしかならない、というわけである。もちろんこれらのウルストンク

ラフトの言及は、ジョージアナの一七八四年の選挙活動を直接的に意識して書かれたものではない。しかしここからは少なくとも、貴族女性の政治参加や既存の議会制度そのものへの懐疑的姿勢が、一七八四年以降にもラディカル・ホイッグのあいだで継続していたことを確認することができるだろう。

以上のように、ラディカル・ホイッグの立場の女性たちの主張を見ていくと、いずれもジョージアナへの直接的な言及ではないにせよ、彼女たちが与党に擦り寄りフォックスの立場や、十分な代表的機能を果たしていない議会制度そのものを「腐敗」や「国制への脅威」ととらえていたことがわかる。このような発想からすれば、ジョージアナが行ったようなフォックス支持の選挙活動は、さらに仲間内での恣意的な権力行使を助長するという点で、むしろ政治腐敗を広げるものとみなされても不思議ではなかっただろう。それにたいし、ジェブやマコーリやウルストンクラフトがそれぞれ強い政治的信条のもとで求めたのは、ひと言でいえば、寡頭制や専制を阻むことのできる、より民意を反映した議会制度改革であった。実は見方を変えれば、一七八四年のウエストミンスター選挙区でのジョージアナやフォックスの活動のなかには、民衆を政治に巻き込むというデモクラティックな要素も含まれていたように見えるが、ラディカル・ホイッグの立場のなかに、そうした要素を「民意を反映する」という点から評価する枠組みは存在しなかったのである。

四 アディソンの伝統を引き継ぐ立場からの反応

最後にあげておきたいのは、第三の「アディソンの伝統」を引き継ぐ立場からの反応である。この立場をひとつの政治的党派とみなすことは難しいかもしれないが、ある種の政治文化を共有した一集団として括ることは可能だろう。より具体的にここでは、十八世紀初頭にジョセフ・アディソンが『スペクテイター』のなかで示したような、激しい党派対立から一步距離を置き、あくまでも「穏健」な改革を求める立場として理解しておくことにしたい。

まずその代表として取り上げたいのは、二節で見たモンタギュ、ボスカウエン、モアなどと同じくブルーストッキン
グ・サークルの一員として文芸活動にたずさわったアナ・レティーシャ・バーボールド (Anna Laetitia Barbauld,
1743-1824) である。バーボールドの父親は、非国教会系の教育機関であるウォリントン・アカデミーの教師を務めた
人物で、バーボールド自身も非国教徒として育てられた。バーボールドは一七八四年にはパルグレーヴにいたが、選挙
期間中の同年五月には、医者だった弟のジョン・エイキン宛てに次のような手紙を送っている。

現在の選挙での身分の高い貴婦人たちの行動について、あなたはどのように思いますか？ 私は新聞が誇張してい
るのだと思っていました。でも、○○氏が言うには、彼自身は○○卿夫人と○○嬢が選挙の票集めのために低級な
酒場に入っていく、三〇分ほどそこにとどまった後、たくさんの侮辱的な言葉をかけながらついでくる群集たちと
ともに、続けて別の酒場に行ったのを見たということです。二人は未婚の貴婦人たちなので、それほど特権がある
わけではないと彼は言っていました。○○「デヴォンシャー」公爵夫人や○○夫人、また他の多くの女性たちは同
じようにして、公衆のために魅力をふりまいているわけです。⁽²⁶⁾

ここでバーボールドは、一七八四年のウエストミンスター選挙区でジョージアナをはじめとする身分の高い女性たち
が、民衆たちと接しながら選挙活動を行っているという友人の目撃証言を、多少の驚きを交えつつ弟に伝えている。た
だし、この手紙のはじめの部分でバーボールドは、当初は「新聞の誇張」を疑っていたと述べており、ここからは彼女
がメディアの力学を考慮に入れた、ジョージアナたちの活動を比較的冷静に受け止めていたことが読み取れる。ま
た、二節で引用したモンタギュ、ボスカウエン、モアの手紙と比べるとわかるように、ここでバーボールドはジョージ
アナたちの行動について、特にはっきりとした価値判断を示しておらず、それを非難めいた論調で伝えているわけでも

ない。

では、バーボールドはこのとき当時の政治状況をどのようにとらえ、自身はどのような政治的立場を取っていたのか。五月の時点では明確な記述がないものの、それ以前に弟宛てに送られた手紙からは、このころの彼女の政治的な交友関係が見えてくる。一七八四年一月二一日の手紙によれば、バーボールドはこのとき、一日のうちに「さまざまな集団 (party)」と出会っていた。たとえば、共和主義者ないしラディカル・ホイッグとして有名だった友人のブランド・ホリスのもとでは、「国民は破滅する」という主張を聞き、その夜のパーティでは「あわれな国王にたいする同情ばかりが聞かれた」という。ここからは、バーボールドが王政を否定する共和主義者とも、またその対極にあたる国王支持者ともそれなりに親しく交際し、一つの政治信条だけにこだわることなく、まさに彼女自身の言葉どおり、「さまざまな党派」の「それぞれ異なる感情を楽しむ」⁽²⁷⁾ んでいたことがわかる。このような姿勢は、単なる政治的無関心のようにも見えるかもしれないが、しかしそれとは明確に区別されるべきだろう。なぜならバーボールド自身、この部分に続けて、一七八三年末以来の政権内部で見られた「驚くべき戦術と急激な変化について知りたいという好奇心を呼び覚まさずにいるのは不可能」だと述べているからである。バーボールドはピット政権の誕生にともなう議会の急展開の様子について、この後の手紙で弟に具体的に報告しており、当時の政治の動きをよく把握していたことがうかがえる。彼女はジョージアナたちの選挙活動についても、その情報を友人や家族同士で共有していたが、同時にそれいながら党派的な反応を示すことを避けていたわけである。

このように十分な政治的知識をもちつつ、あえて政治的な対立や抗争から距離を取ろうとする姿勢は、もちろんすべてアディソンひとりに還元できるものではないだろう。アディソンの政治態度をその後、十八世紀半ばに積極的に受け継いだのは、スコットランドの知識人たちであった。おそらくバーボールドは、宗教的理由によりイングランドの大学ではなくスコットランドの大学に進学することの多かった非国教徒の人的ネットワークをつうじて、スコットランド

經由のアディソンの政治文化を受容していたように思われる。⁽²⁹⁾ こうしたスコットランドにおけるアディソンの伝統のなかで、ジョージアナのような女性の選挙活動がどのように受け止められたのかを知るための恰好の史料として、ここで雑誌『ラウンジャー』の記載に触れておきたい。この雑誌は、小説『感情の人』の作者として知られるヘンリー・マケンジーがエディンバラで刊行したもののだが、一七八五年四月九日付けの第一〇号では、ちょうど前年にウエストミンスターで行われた選挙が話題に取り上げられている。マケンジーによると、この選挙戦ではビット支持者とフォックス支持者のあいだできわめて暴力的な対立が見られ、さらに「不幸にも、同じくらいに激しい党派精神がご婦人たちのあいだに蔓延した」という。⁽³⁰⁾ かつて『スペクテイター』でアディソンは、「党派的な熱狂」は男性の害悪であり、女性の「穏やかさ」や「慎ましき」とはまったく相容れないと述べたが、マケンジーいわく、「われわれの女性政治家たち（female politicians）はあまりに行き過ぎてしまい」、自分たちの党派を支持するためにバナナを掲げて行進し、断固とした態度で精力的に選挙活動を展開している。「アディソン氏が、同時代の女性たちが党派のワッペンをつけることなどありえないと思っていたとすれば、もし彼が生きていて、われわれが見てきたことを目にしたら、はたして彼は何と言うだろうか。」⁽³¹⁾ このように『ラウンジャー』のなかでマケンジーは、『スペクテイター』におけるアディソンの議論を引き合いに出しながら、一七八四年の選挙戦に参加した女性たちの行動を嘆いてみせた。どちらの党派を応援するにせよ、女性にとつては党派対立に関わることで自体が問題だというわけである。

このような『ラウンジャー』の論調を受け継いだ女性著述家として、最後に取り上げておきたいのがエリザベス・ハミルトン（Elizabeth Hamilton, 1738-1816）である。ハミルトンは北アイルランドのベルファストで生まれたが、幼少期からスコットランドで育ち、この地の知的土壌を吸収しながらやがて小説や教育書を著すようになる。彼女はちょうど一七八五年の一二月に『ラウンジャー』に記事を投稿していたので、もしかしたら彼女自身、同年の第一〇号に載っていたマケンジーの小論を読んでいたかもしれない。いずれにせよ、やや時代が下ってから書かれた教育書のなか

で、ハミルトンは党派対立を回避しようとする女性的特質を讃えるアディソンの姿勢を明らかにしている。一八〇二年に発表された『教育の第一原理にかんする手紙』のなかで、ハミルトンは党派対立の問題について次のように書いている。

党派的な偏見を早い時期から身につけてしまうことほど、判断力の育成にとって有害なものはありません。それにより構想力は惑わされ、正しいものと不正なものについての判断力は結果的にしばしば間違ったものとならざるをえない。……もし判断力の育成が一度でも女子教育の対象となっていたら、おそらく女性の政治家たち (fair politicians) の熱狂はいくらかでも抑えられたことだろう。

ハミルトンによれば、判断力と党派精神とは互いに相容れないものであり、党派的な偏見にとらわれると、自分が属している党派の都合からのみ物事をとらえてしまい、公平な判断力は身につかない。逆に、判断力を正しく身につけていれば、党派的な熱狂に駆立てられることなく、物事の正と不正を見極めることができるようになるという。もちろんここでハミルトンは、ジョージアナたちが行ったような一七八四年の選挙活動そのものを念頭に置いているわけではない。むしろ直接的な文脈としては、フランス革命後のイギリス国内の政治的な二極化状況を指していると考えべきだろう。しかし文脈の違いはあるにせよ、「女性の政治家たち」の熱狂にたいする批判の枠組みが、先のマケンジーの小論に見られたようなアディソンの伝統を引き継いだものであることには変わりがない。ハミルトンは引用部分に続けて、女性の義務は「公の争い」に加わるのではなく、「戦いの傷を癒すこと」や「党派的な激しい憎しみを鎮めること」や「ざらついた憤りの気持ちを和らげること」などにあり、こうした中立的な位置をとることによって、女性は社会の調停者や平和のつくり手になることができると主張している。⁽³²⁾ このように「中庸」の精神を重んじるハミルトンか

らすると、ジョージアナのように選挙活動に夢中になる女性は、バランスのとれた「判断力」を欠いた存在と映ったにちがいない。ハミルトンはアディソンの伝統を継承しつつ、女性が党派政治に直接的に関わるのではなく、より広い社会的領域のもとで自分自身や周囲の人の判断力を養うことにより、教育をつうじた穏健な改革の手助けをするこ
とができると考えたのである。

さて、このようにアディソンの伝統を引き継いだ立場をまとめると、バーボールドとハミルトンはともに、ジョージアナのように直接的に選挙活動に加わり党派対立を煽る女性たちに懐疑的なまなざしを向けていたといつてよい。重要なのは彼女たちの否定的な反応が、ピット支持の女性たちやラディカル・ホイッグの女性たちの場合のように、ジョージアナとの政治的党派の違いからというより、党派対立そのものを忌避する姿勢から生まれていた点だろう。アディソンの伝統を引き継ぐ立場からすると、批判されるべきなのはジョージアナだけではなく、ピット支持の女性たちやラディカル・ホイッグの女性たちでもあったわけである。そうした女性たちとは異なり、バーボールドやハミルトンは、自身としては十分な政治的知識をもった上で、抗争の渦中から一歩ひいた位置をとり、政治のなかで生じる党派的な不寛容や熱狂や偏見を薄める役割をみずから選びとった。もしこうした彼女たちの選択を、激しい党派対立を伴わない政治のかたちを求めた姿勢としてとらえることができるとすれば、これもひとつの政治的立場ではあったはずである。

おわりに

本稿では、一七八四年のウエストミンスター選挙区でのジョージアナの選挙活動、あるいはジョージアナのような女性の政治活動にたいする十八世紀末の女性著述家たちの否定的な言説を、三つのカテゴリーに分けて跡づけてきた。二節で見たように、モンタギュ、ボスカウエン、モアはいずれもピットを支持する立場から、ジョージアナの大胆な選挙

活動にたいしてもつぱら党派的な反感を抱き、その振る舞いを辛辣に批判した。次に三節で触れたジェブとウルストンクラフトは、いずれもジョージアナの活動に直接的に言及してはいなかったが、より民主的な議会改革を求めるラディカル・ホイッグの立場から、ジョージアナが行ったようなフォックス支持の選挙活動を、むしろ政治腐敗を広げるものとみなす認識枠組みを提示した。最後に四節で検討したバーボールドとハミルトンは、ともに党派精神を嫌うアディソンの伝統を引き継いで、ジョージアナのように政治対立のなかで熱狂的に活動する女性にたいして懐疑的な視線を送った。これらはいずれも、ジョージアナの選挙活動や彼女のような女性の政治活動にたいする批判というかたちをとっていたが、その内容は女性が政治に参加すること自体にたいする批判というよりも、ジョージアナと彼女たちとの政治的立場や政治文化の違いに由来する反発だったと結論づけることができるだろう。本稿で見てきた個々の女性たちは、それぞれの論理でみずからの考える政治への関わり方を表現していたからである。

もしこうした女性たち、あるいは少なくともその一部が、ジョージアナとの差異化をはかることをつうじて独自の政治的立場や政治文化をはっきりと意識することになったとすれば、やはり一七八四年のジョージアナの選挙活動をひとつのきっかけとして、多元的なかたちで女性の政治意識の形成が促されることになったということはできるだろう。実際、やがて一七九〇年代になると、ここで見てきたウルストンクラフトやハミルトンだけでなく、モアやバーボールドも、政治パンフレットや政治的小説の執筆というかたちをとって、みずから政治に関わっていく。たしかに一七八四年のウエストミンスター選挙区でジョージアナが起こした行動は、ひとつの小さな変化に過ぎなかったのかもしれない。しかし、この選挙戦でのジョージアナの行動が多く的女性たちのあいだで話題にのぼったことにより、女性の政治参加にさまざまなかたちがありうるものが広く認識されたとすれば、彼女が後の時代の女性たちに与えたインパクトは決して小さいものではなかったように思われる。

付記 本論文は、二〇〇九年六月一日にアルカディア市ヶ谷（私学会館）で開催された日本ジョンソン協会第四二回大会シンポジウム「ミス・スペンサーからレディ・ジョージアナ、そしてデヴォンシャー公爵夫人へ——ジョージアナと家族、政治、表象、小説」で行った報告「ジョージアナと女性の政治参加」をもとに、その内容を一部書き改めたものである。準備段階からお世話になった向井秀忠氏、鈴木実佳氏、一ノ谷清美氏をはじめ、日本ジョンソン協会の関係者の方々にお礼を申し上げる。

注

- (1) デヴォンシャー公爵夫人の名は当時、「ジョージエーナ」と発音されていたという説もあるが、ここでは日本ですでに定着している「ジョージアナ」という表記を用いることとする。
- (2) 一七八四年のウェストミンスターでの選挙戦にかんしては、J. Hartley (ed.), *History of the Westminster election, containing every material occurrence, from its commencement on the first of April, to the final close of the poll, on the 17th of May* (London, 1784) の「ジョージアナの諷刺画を含めた詳しい記録がある」。
- (3) Linda Colley, *Britons: forging the nation, 1701-1837* (New Haven: Yale University Press, 1992). (川北稔監訳『イギリス国民の誕生』名古屋大学出版会、二〇〇〇年)。
- (4) Amanda Foreman, *Georgiana: Duchess of Devonshire* (London: HarperCollins, 1998). なお、二〇〇八年にはこの伝記をもとにした『ある公爵夫人の生涯 (The Duchess)』という映画が公開された。しかし残念ながら、この映画のなかではジョージアナの選挙活動にあまり焦点が当てられていない。フォアマンによる別の論文、Amanda Foreman, 'A politician's politician: Georgiana, Duchess of Devonshire and the Whig party', in Hannah Baker and Elaine Chalus (eds.), *Gender in Eighteenth-century England* (London: Longman, 1997) を参照のこと。
- (5) たこめぢ、次のものを参照。Anna Stott, "Female patriotism": Georgiana, Duchess of Devonshire, and the Westminster election of 1784, *Eighteenth Century Life* 17 (1993), 60-84; Phyllis Deutsch, 'Moral trespass in Georgian London: gaming, gender and electoral politics in the age of George III', *Historical Journal* 39 (1996), 637-56; Amelia Rausser, 'The butcher-kissing Duchess of Devonshire: between caricature and allegory in 1784', *Eighteenth-Century Studies* 36 (2002),

- 23-46; Anna Clark, *Scandal: the sexual politics of the British constitution* (Princeton: Princeton University Press, 2004); Elaine Chalus, 'Kisses for votes: the kiss and corruption in eighteenth-century English elections', in Karen Harvey (ed.), *The kiss in history* (Manchester: Manchester University Press, 2005).
- (9) Judith Schmeid Lewis, '1784 and all that: aristocratic women and electoral politics', in Amanda Vickery (ed.), *Women, privilege and power: British politics, 1750 to the present* (Stanford: Stanford University Press, 2001).
- (7) Renata Lana, 'Women and the Foxite strategy in the Westminster election of 1784', *Eighteenth Century Life*, 26:1 (2002), 46-69.
- (8) こうした女性史研究の新たな潮流の代表例としては、次のものがあげられる。Amanda Vickery, *The gentleman's daughter: women's lives in Georgian England* (New Haven: Yale University Press, 1998); Kathryn Gleadle and Sarah Richardson (eds.), *Women in British politics, 1760-1860: the power of petticoat* (Basingstoke: Macmillan, 2000); Elaine Chalus, *Elite women in English political life, c. 1754-1790* (Oxford: Oxford University Press, 2005).
- (9) この選挙戦については、それをより広い議会史のなかに位置づけた次の書物がたいくち啓発的である。青木康「議員が選挙区を選ぶ——十八世紀イギリスの議会政治」山川出版社、一九九七年。
- (10) Foreman, *Georgiana*, p. 143.
- (11) なしと見せ、Charlotte Turner Smith, *Rambles farther: a continuation of rural walks: in dialogues. Intended for the use of young persons*, 2 vols. (London, 1796), vol. 1 の献辞を参照。
- (12) Letter from Elizabeth Montagu to ? (circa April 1784), in Reginald Blunt (ed.), *Mrs. Montagu, "Queen of the Blues": her letters and friendship from 1762 to 1800*, 2 vols (London: Constable, 1923), vol. 2, p. 169.
- (13) Ibid.
- (14) Letter from Frances Evelyn-Granville, Hon. Mrs. Edward Boscawen to Hester Pitt, Lady Chatham (Audley Street, April 12, 1784), in Vere Birdwood (ed.), *So dearly loved, so much admired: letters to Hester Pitt, Lady Chatham from her relations and friends 1744-1801* (London: HMSO, 1994), p. 161.
- (15) Letter from Hannah More to Ann Kennicott (London, 22 Apr [1784]), in Anna Stott, *Hannah More: the first Victorian* (Oxford: Oxford University Press, 2003), p. 66.

- (16) Letter from Hannah More to her sister (circa April 1784), in William Roberts (ed.), *Memoirs of the life and correspondence of Mrs. Hannah More*, 4 vols (London: R. B. Shelley and W. Burnside, 1834), vol. 1, pp. 315-316.
- (17) *Ibid.*, p. 316.
- (18) なおモアはその後、一七八〇年代後半になると福音主義への回心を遂げ、宗教的義務を果たさない上流階級への批判を強めていくが、そのなかで彼女はジョージアナにますます否定的な評価を下すようになっていく。一八〇四年にウィリアム・ウィルバーフォースに宛てて送った手紙では、ジョージ皇太子（後のジョージ四世）の娘であるシャーロット皇女の教育係にジョージアナが就任するのではないかという噂を聞きつけたモアが、この「最悪の事態」をどうしても阻止しなければならぬと書いてくる。Stott, *Hannah More*, p. 206.
- (19) Letter from John Jebb to ? (circa 1783), in John Disney (ed.), *The works theological, medical, political, and miscellaneous of John Jebb, M. D. F. R. S. With memoirs of the life of the author*, 3 vols (London, 1787), vol. 1, p. 199.
- (20) Anthony Page, *John Jebb and the Enlightenment origins of British radicalism* (Conneticut: Praeger, 2003), p. 30.
- (21) Letter from Ann Jebb to John Cartwright (22 January 1784), in G. W. Meadley, 'Memoirs of Mrs. Jebb', *Monthly Repository* 7 (1812), p. 602.
- (22) *Ibid.*
- (23) Letter from Ann Jebb to John Cartwright (3 March 1784) in G. W. Meadley, 'Memoirs of Mrs. Jebb', *Monthly Repository* 7 (1812), p. 602.
- (24) たこぞ次 次の箇所を参照。Mary Wollstonecraft, *A vindication of the rights of men and A vindication of the rights of woman*, ed. by Sylvana Tomaselli (Cambridge: Cambridge University Press, 1995), pp. 76, 117, 154, 235. (白井堯千記『女性の権利の擁護』未来社、一九八〇年、二六、九〇、一四四、二七五頁。)
- (25) *Ibid.*, p. 278. (邦訳、二二七頁。)
- (26) Letter from Anna Laetitia Barbauld to John Aikin (Palgrave, May 1784), in Lucy Aikin (ed.), *The works of Anna Laetitia Barbauld*, 2 vols (London, 1825), vol. 2, p. 26. なお、バーホルトの死後に出版されたこの著作集では、手紙のなかの具体的な名前が伏せられている。引用部分にジョージアナへの言及が含まれているという解釈は、次の研究書に従ったものである。Harriet Guest, *Small change: Women, learning, patriotism, 1750-1810* (Chicago: The University of

- Chicago Press, 2000), pp. 103-104.
- (27) Letter from Anna Laetitia Barbauld to John Aikin (Palgrave, 21 January, 1784), in Aikin (ed.), *The works*, vol. 2, p. 24.
- (28) Ibid., p. 25.
- (29) なおバーボールドはその後、一八〇四年にはみづから『スペクテイター』や『タトラ』からいくつかの随筆を選んだダイジェスト版を編集して出版。 *Selections from the Spectator, Tatler, Guardian, and Freeholder: with a preliminary essay by Anna Laetitia Barbauld*, 3 vols. (London, 1804).
- (30) Henry Mackenzie, *The Lounger, a periodical paper, published at Edinburgh in the years 1785 and 1786*, 3 vols (London, 1787), vol. 1, pp. 93-94.
- (31) Ibid., p. 94.
- (32) Elizabeth Hamilton, *Letters on the elementary principles of education*, 2 vols. (London, 1802), vol. 1, pp. 222-223.